

舞姫

森鷗外

青空文庫

石炭をば早はや積み果てつ。中等室つくるの卓はのほとりはいと静にて、
 熾しねつとう熱燈の光の晴れがましきも徒いたづらなり。今宵は夜毎にこゝに集ひ
 来る骨牌カルタ仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人ひとりのみな
 れば。

五年いつとせまへ前の事なりしが、平生ひびろの望足りて、洋行の官命かうむを蒙り、
 このセイゴンの港まで来こし頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、
 一つとして新あらたならぬはなく、筆に任せて書き記しるしつる紀行文日ご
 とに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にも
 てはやされしかど、今日けふになりておもへば、釋をさなき思想、身の程知ほど
 らぬ放言、さらぬも尋よのつね常の動植金石、さては風俗などをさへ珍

しげにしるしゝを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、ドイツ独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東ひんがしかへに還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感触を、筆に写して誰たれにか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンヂイシイの港を出でゝより、早や二十日はつかあまりを

経ぬ。世の常ならば生せいめん面の客にさへ交まじはりを結びて、旅の憂さを慰
 めあふが航海ならひの習なるに、微恙びやうにことよせて房へやの裡うちにのみ籠こもりて、
 同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨かしろに頭かしらのみ悩まし
 たらばなり。此この恨は初め一抹の雲の如く我心わがを掠かすめて、瑞西スイスの山
 色をも見せず、伊太利イタリヤの古蹟にも心を留めさせず、中頃は世いとを厭
 ひ、身をはかなみて、腸はらわた日ごとに九廻すともいふべき惨痛をわれ
 に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳かげとのみなりたれ
 ど、文読ふみむごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響の
 如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾いくたび度となく我心を苦む。
 嗚呼、いかにしてか此恨せうを銷せうせむ。若もし外ほかの恨なりせば、詩に詠
 じ歌によめる後は心地こゝちすがくしくもなりなむ。これのみは余り

に深く我心に彫りつけられたればさはあらしと思へど、今宵はあ
たりに人も無し、房奴の来て電気線の鍵を振るには猶程もあるべ
ければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひ
つれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、
東京に出で、予備黌に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、
太田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一
人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳に
は学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名
誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び
迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしか

ば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々と家を離れてバルリンの都に来ぬ。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するとき、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪かみの如きウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だゝみの人道を行く隊々くみの士女を見よ。胸張り肩聳そびえたる士官の、まだ維廉キルヘルム一世の街に臨める窓まどに倚り玉ふ頃なりければ、様々の色

に飾り成したる礼装をなしたる、妍かほよき少女をとめの巴里パリまねびの粧よそほひしたる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道チャンの土瀝青チヤンの上を音もせで走るいろくの馬車、雲に聳ゆる楼閣の少しとぎれたる処ところには、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井ふきゐの水、遠く望めばブランデンブルク門を隔て、緑樹枝をさし交かはしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多あまたの景物もくせふ目睫うべの間に聚あつまりたれば、始めてこゝに來こしもの、応接いとまに違なきも宜うべなり。されど我胸には縦たとひいかなる境に遊びても、あだなる美觀さへぎに心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物さへぎを遮り留めたりき。

余すなはが鈴すなは索なはを引き鳴らして謁えつを通じ、おほやけの紹介状を出だして東來の意を告げし普魯西プロシヤの官員は、皆快く余を迎へ、公使館

よりの手つゞきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故里ふるさとにて、独逸、フランス、仏蘭西の語を学びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事の暇いとまあるごとに、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊ぼさつに記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第はかどに拂り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、つひには幾いくまき巻をかなしけむ。大学のかたにては、穉ちき心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうも

あらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵かうえんに列ることにおもひ定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。

かくて三年みとせばかりは夢の如くにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒ほむるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ほげますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥おだやかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも

宜よろしからず、また善く法典を諳そらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私ひそかに思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣さ々たる問題にも、極めて丁寧ていねいにいらへしつる余が、この頃より官長に寄する書には連しきりに法制の細目かづらに拘かふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹の如くなるべしなど、広言しつ。又大学にては法科の講筵よそを余所よそにして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗しよを嚼かむ境に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけ

め。独立の思想を懐いだきて、人なみならぬ面おももちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆くつがへすに足らざりけんを、日比伯林ひごろベルリンの留学生うちの中にて、或る勢力ある一群ひとむれと余との間に、面白からぬ関係ありて、彼人々は余を猜疑さいぎし、又遂つひに余を讒誣ざんぶするに至りぬ。されどこれとても其故なくてやは。

彼人々は余が俱ともに麦酒ビールの杯をも挙げず、球突きキユウの棒をも取らぬを、かたくななる心と慾を制する力とに帰して、且かつは嘲あざけり且ねたは嫉ねたみたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎いかでか人に知らるべき。わが心はかの合ね歡むといふ木の葉に似て、物触さやれば縮みて避けんとす。我心は処女

に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、まなび学の道をたどりし
も、仕つかへの道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能よくしたるにあらず、
耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、
人のたどらせたる道を、唯ただ一ひとすぢ条にたどりしのみ。余所に心の
乱れざりしは、外物を棄て、顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯たゞ
外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前
も、我が有為の人物なることを疑はず、又我心の能く耐へんこと
をも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、
天あつぱれ晴豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手しゆきん巾を濡らしつるを
我れ乍ながら怪しと思ひしが、これぞなか／＼に我本性なりける。此
心は生れながらにやありけん、又早く父を失ひて母の手に育てら

れしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。

この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐

して客を延く女を見ては、往きてこれに就かん勇氣なく、高き帽

を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音に

て物言ふ「レエベマン」を見ては、往きてこれと遊ばん勇氣なし。

此等の勇氣なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らんやうもなし。

この交際の疎きがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみな

らで、又余を猜疑することゝなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負

ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を漫歩して、ウンテル、デン、
 リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居けうきよに帰らんと、クロ
 ステル巷かうの古寺の前に来ぬ。余は彼の燈火ともしびの海を渡り来て、こ
 の狭く薄暗き巷こうぢに入り、楼上の木欄おぼしまに干したる敷布、襦袢はだぎなど
 まだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁おきなが戸前こぜんに佇みたる居酒
 屋、一つの梯はしごは直ちに楼たかどのに達し、他の梯あなぐらは窄住まひの鍛冶かぢが家に
 通じたる貸家などに向ひて、凹字あふじの形に引籠みて立てられたる、
 此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し佇みしこと
 幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖とぎしたる寺門の扉に倚りて、声
 を呑みつゝ泣くひとりの少女をとめあるを見たり。年は十六七なるべし。

被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遭ひて、前後を顧みる違なく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大胆なるに呆れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が真率なる心や色に形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらしじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは慥はぬに、家に一銭の貯だになし。」

跡は歎歎の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我肩

に倚りしが、この時ふと頭かしらを擡もたげ、又始てわれを見たるが如く、
恥ぢて我側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしきに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋
向ひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼり
て、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。少女は鏽さびびたる針
金の先きを振ねぢ曲まげたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳せき
枯はがれたる老媪おうなの声して、「誰たぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる
間もなく、戸をあらゝかに引開ひきあけしは、半ば白しらみたる髪、悪あしき
相にはあらねど、貧苦の痕ぬかを額ぬかに印せし面の老媪にて、古き獸綿
の衣を着、汚れたる上靴はを穿はきたり。エリスの余に会釈して入る
を、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇はげしくたて切りつ。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈ラムペの光に透して戸を
 見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆うるしもて書き、下に仕立物師と
 注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ
 争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老
 媪いんぎんは慇懃いんぎんにおのが無礼の振舞せしを詫わびて、余を迎へ入れつ。
 戸の内は厨くりやにて、右手めての低き窓に、真白ましろに洗ひたる麻布を懸けた
 り。左手ゆんでには粗末ゆんでに積上げたる煉瓦の竈かまどあり。正面の一室の戸は
 半ば開きたるが、内には白布しらぬのを掩ふしどへる臥床あり。伏したるはな
 き人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処いはゆは所
 謂る「マンサルド」の街に面したる一間ひとまなれば、天井もなし。隅
 の屋根裏より窓に向ひて斜はりに下れる梁を、紙にて張りたる下の、

立たば頭の支ふべき処に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。それが傍に少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く裊なるは、貧家の女に似ず。老媪の室を出でし跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「キクトリア」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年年れば、事なく我等を助けん

と思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を析きて還し参らせん。縦令我身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。「彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のたぬに出したる手を唇にあてたるが、はらくと落つる熱き涙を我手の背に濺ぎつ。

嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとして、自ら我僑居けうきよに来し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、ひねもすこつぎ終日兀坐する我読書の窓下さうかに、一輪の名花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸まじはりく繁くなりもて行きて、同郷人にさへ知られぬれば、彼等は速そくれう了りにも、余を以て色を舞姫の群ぐんに漁ぎよするものとしたり。われ等二人の間にはまだ痴ちがいなる歡樂のみ存したりしを。

その名を斥ささんは憚はづかりあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余が屢しばしば《しばしば》芝居に出入して、女優と交るといふことを、官長の許もとに報じつ。さらぬだに余が頗すこぶる学問の岐路きろに走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に伝へて、我官を免じ、我

職を解いたり。公使がこの命を伝ふる時余に謂ひしは、御身若し
即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らんに
は、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予
を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我生涯にて尤も悲痛を覚え
させたる二通の書状に接しぬ。この二通は殆ど同時にいだし、も
のなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がま
たなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をこゝ
に反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時までには余所目に見るより清白な
りき。彼は父の貧きがために、充分なる教育を受けず、十五の時
舞の師のつのに応じて、この恥づかしき業を教へられ、「クル

ズス」果て、後、「エクトリア」座に出で、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが当世の奴隷といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋がれ、昼の温習、夜の舞台と緊きびしく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らず勝なれば、親腹からを養ふものはその辛苦いかに何ぞや。されば彼等の仲間にて、賤いやしき限りなる業に墮おちぬは稀まれなりとぞいふなる。エリスがこれをのがれしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物読むことをば流石さすがに好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジユ」と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相識あひしる頃より、余が借しつる書を読み

ならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛なまりをも正し、いくほどもな
 く余に寄するふみにも誤あやまり字じ少なくなりぬ。かゝれば余等二人
 の間には先づ師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞
 きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に関りしを包み隠
 しぬれど、彼は余に向ひて母にはこれを秘め玉へと云ひぬ。こは
 母の余が学資を失ひしを知りて余を疎うとんぜんを恐れてなり。

嗚呼、委くはくこゝに写さんも要なけれど、余が彼を愛めづる心にはかの俄
 に強くなりて、遂に離れ難き中となりしは此折なりき。我一身の
 大事は前に横よこたりて、洵まことに危急存亡ときの秋なるに、この行おこなひしをあ
 やしみ、又た誹そしる人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、
 始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我数奇さくきを憐み、又別

離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢びんの毛の解けてかゝりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にこゝに及びしを奈何いかにせむ。

公使に約せし日も近づき、我命めいはせまりぬ。このまゝにて郷にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ。さればとて留まらんには、学資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯へんしふちやう長に説きて、余を社の通信員となし、伯林ベルリンに留まりて政治学芸の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家すみかをもうつし、午餐ひるげに
 往く食たべもの店みせをもかへたらんには、微かすかなる暮しは立つべし。兎角とかう
 思案する程に、心の誠を顕あらはして、助の綱をわれに投げ掛けしは
 エリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼等親子
 の家に寄寓することゝなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、
 有るか無きかの収入を合せて、憂きがなかにも楽しき月日を送り
 ぬ。

朝の咖カツフエエ

果つれば、彼は温習に往き、さらぬ日には家に留
 まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所
 に赴おもむき、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出で、彼此と材料を集む。
 この截きり開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業わざなき若わ

かうど
 人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所
 の業の隙を偷みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石
 卓くゑの上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て来る一
 盞きの咖さの冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに
 挿みたるを、幾種いくいろとなく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度と
 なく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。又一時近くな
 るほどに、温習に往きたる日には返り路ぢによぎりて、余と俱ともに店
 を立出づるこの常ならず軽き、掌しやうじやう上うへの舞をもなしえつべき少
 女を、怪み見送る人もありしなるべし。

我学問は荒すさみぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが劇場より
 かへりて、椅いすに寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原

稿を書けり。昔しの法令条目の枯葉を紙上に搔寄せしとは殊にて、
 今は活潑々たる政界の運動、文学美術に係る新現象の批評など、
 彼此と結びあはせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりは寧ろハイ
 ネを学びて思を構へ、様々の文を作りし中にも、引続きて維
 廉ム 一世と仏得力三世との崩殂ほうそありて、新帝の即位、ビスマル
 ク侯の進退如何いかんなどの事に就ては、故らに詳かなる報告をなしき。
 さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵
 書を繙ひもとき、旧業をたづぬることも難く、大学の籍はまだ刪けづられね
 ど、謝金を収むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵だに往
 きて聴くことは稀なりき。

我学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをい

かにといふに、凡そ民間学の流布したることは、歐洲諸国の間に
 て独逸に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論には
 頗る高尚なるもの多きを、余は通信員となりし日より、曾て大学
 に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、讀みては又讀み、
 写しては又写す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら
 綜括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境
 地に到りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ讀ま
 ぬがあるに。

明治廿一年の冬は来にけり。表街おもてまちの人道にてこそ沙すなをも時ま

け、挿のつくり」、161-下-29] 《すき》をも揮へ、クロスステル

街のあたりは凸凹とつあふかんかの処は見ゆめれど、表のみは一面に氷り

て、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。
 室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿を穿つ
 北欧羅巴の寒さは、なかくに堪へがたかり。エリスは二三日前
 の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に扶けられて歸り来しが、それ
 より心地あしとて休み、もの食ふごとに吐くを、悪阻といふもの
 ならんと始めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覚束な
 きは我身の行末なるに、若し真なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に
 臥すほどにはあらねど、小き鉄炉の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。
 この時戸口に人の声して、程なく庖厨にありしエリスが母は、
 郵便の書状を持って来て余にわたしつ。見れば見覚えある相沢が手

なるに、郵便切手は普魯西プロシヤのものにて、消印には伯林ベルリンとあり。
訝いぶかりつゝも披ひらきて読めば、とみの事にて預あらかじめ知らするに由なかり
しが、昨夜よべこゝに着せられし天方大臣に附きてわれも来たり。伯
の汝なんぢを見まほしとのたまふに疾とく来よ。汝が名誉を恢復するも此
時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみいひ遣やるとなり。読
み畢をはりて茫然たる面もちを見て、エリス云ふ。「故郷よりの文な
りや。悪たよりしき便にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書
状と思ひしならん。「否、心にな掛けそ。おん身も名を知る相沢
が、大臣と俱にこゝに来てわれを呼ぶなり。急ぐといへば今より
こそ。」

かはゆき独り子を出し遣る母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみ

えもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦うはじゆ袴ぼんも極めて白きを撰び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロツク」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が為めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰たれも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何なにゆゑ故ゆゑにかく不興なる面もちを見せ玉ふか。われも諸もろとも共に行かまほしきを。」少し容かたちをあらためて。「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豊太郎の君とは見えず。」又た少し考へて。「縦令よしや富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母のたまの宣ふ如くならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは

絶ちしより幾年いくとせをか経ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。「エリスが母の呼びし一等「ドロシユケ」は、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被おほひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼たかどを下りつ。彼は凍れる窓を明け、乱れし髪を朔風さくふうに吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホオフ」の入口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階はしを登り、中央の柱に「プリユツシュ」を被へる「ゾファ」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脱わぎ、廊わたをつたひて室の前まで行きしが、余は少し踟蹰ちちちうしたり。同じく大学

に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、けふは
 怎いかなる面もちして出迎ふらん。室に入りて相對して見れば、形こ
 そ旧に比ぶれば肥えて逞たくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、
 我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するに
 も違いとまあらず、引かれて大臣に謁し、委托せられしは独逸語にて記
 せる文書の急を要するを翻譯せよとの事なり。余が文書を受領し
 て大臣の室を出でし時、相沢は跡より来て余と午餐ひるげを共にせんと
 いひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑
 なりしに、轆轤かんか数奇さくきなるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歴を聞きて、かれは屢

驚きしが、なか／＼に余を譴^せめんとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢^{をは}りしとき、彼は色を正して諫^{いさ}むるやう、この一段のことは素^もと生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生^{なりは}活^ひをなすべき。今は天方伯も唯だ独逸語を利用せんの心のみなり。おのれも亦^{また}伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強^{しひ}て其心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲^{きよく}庇^ひ者なりなんと思はれんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦^{すす}むるは先づ其能を示すに若^しかず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との関係は、縦令彼に誠ありとも、縦令情交は深くなりぬとも、

人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して断てと。是れその言のおほむねなりき。

大洋に舵かぢを失ひしふな人が、遙はるかなる山を望む如きは、相沢が余に示したる前途の方ほう鍼しんなり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果して往きつきぬとも、我中心に満足を与へんも定かならず。貧きが中にも樂しきは今の生なり活はひ、棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めんよしなかりしが、姑しばらく友の言ことに従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に對して否とはえ對こたへぬが常なり。

別れて出づれば風面おもてを撲うてり。二重ふたへの玻璃窓ガラスを緊しく鎖して、

大いなる陶炉に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、はだぬはだ膚粟立つと共に、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻譯は一夜になし果てつ。「カイゼルホーフ」へ通ふことはこれより漸く繁くなりもて行く程に、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近ちかごろ比故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて、「余は明日あす、魯西亞ロシアに向ひて出発すべし。したが随ひて来べきか、」と問ふ。余は数日間、かの公務に違なき相沢を見ざりしかば、此問は不意に余を

驚かした。「いかで命に従はざらむ。」余は我恥を表はさん。此答はいち早く決断して言ひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範囲を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、その為し難きに心づきても、強て当時の心虚なりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを実行すること屢々なり。

此日は翻譯の代に、旅費さへ添へて賜はりしを持って帰りて、翻譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亜より帰り来んまでの費をば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月

ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我心を厚く信じたれば。

鉄路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合せて借りたる黒き礼服、新に買求めたるゴタ板の魯廷ろていの貴族譜、二三種の辞書などを、小「カバン」に入れたるのみ。流石に心細きことのみ多きこの程なれば、出で行く跡に残らんも物憂かるべく、又停車場にて涙こぼしなどしたらんには影うしろめた護いたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出しやりつ。余は旅装整へて戸を鎖し、鍵をば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行につきては、何事をか叙すべき。わが舌ぜつじん人たる任務つとめは

忽たちまち地に余を拉らつし去りて、青雲の上に墮おとしたり。余が大臣の一行に随まひて、ペエテルブルクに在りし間に余を囿みねう繞せしは、巴里絶頂の驕けうしや奢しやを、氷雪の裡うちに移したる王城の粧さうしよく飾しよく、故らことさに黄わうら蠟ふしよくの燭しよくを幾いくつ共ともなく点としたるに、幾星の勳章、幾枝の「エポレツト」が映射する光、彫鏤てうるの工たくみを尽したる「カミン」の火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間仏蘭西語を最も円滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書ふみを寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて燈火に向はん事の心憂もとさに、知る人の許もとにて夜に入るまでも語りし、

疲るゝを待ちて家に還り、直ちにいねつ。次の朝あした目醒めし時は、猶独り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かゝる思ひをば、生計たつきに苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書あらましの略なり。

又程経てのふみは頗る思ひせまりて書きたる如くなりき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心の深き底そこひをば今ぞ知りぬる。君は故里ふるさとに頼たのもしき族やからなしとのたまへば、此地に善き世渡のたつきあらば、留り玉はぬことやはある。又我愛もて繋ぎ留めでは止やまじ。それも慚かなはで東ひんがしに還り玉はんとならば、親と共に往かんは易けれど、か程に多き路用を何処いづくよりか得ん。怎いかなる業をなしても此地に留りて、君が世に出で玉はん日をこそ待ため

と常には思ひしが、暫しの旅とて立出で玉ひしより此二十日ばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。袂たもとを分つはたゞ一瞬の苦く艱げんなりと思ひしは迷なりけり。我身の常ならぬが漸くにしるくなれる、それさへあるに、縦よしや令いかなることありとも、我をば努ゆめな棄て玉ひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東ひんがしに往かん日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉はゞ、我路用の金は兎も角もなりなん。今は只ひたすら管君がベルリンにかへり玉はん日を待つのみ。

嗚呼、余は此書を見て始めて我地位を明視し得たり。恥かしき

はわが鈍にぶき心なり。余は我身一つの進退につきても、また我身に係らぬ他人ひとの事につきても、決断ありと自ら心に誇りしが、此決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照さんとするとき、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが尽したる職分をのみ見き。余はこれに未来の望を繋ぐことには、神も知らむ、絶えて想到おもひらざりき。されど今こゝに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟か。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の禽とりの如くなりしが、今は稍 《やゝ》これを得たるかと思はるゝに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に歸りて後も俱にかくてあらばしか云々、といひしは、大臣のかく宣のたまひしを、友ながらも公事なれ

ば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が輕卒にも彼に向ひてエリスとの關係を絶たんといひしを、早く大臣に告げやしけん。

嗚呼、独逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。曩さきにこれを繰あやつりしは、我某省わがながしの官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行と俱にベルリンに歸りしは、恰あたらも是れ新年の旦あしたなりき。停車場に別を告げて、我家をさして車を驅かりつ。こゝにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習なれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きら／＼と輝けり。

車はクロステル街に曲りて、家の入口に駐まりぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えず。馭丁ぎよていに「カバン」持たせて梯を登らんとする程に、エリスの梯を駈け下るに逢ひぬ。彼が一声叫びて我頸うなじを抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭ひげの内にて云ひしが聞えず。「善くぞ帰り来玉ひし。帰り来玉はずば我命は絶えなんを。」

我心はこの時まで定まらず、故郷を憶おもふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を压せんとせしが、唯ただ此一刹せつな、低徊ていくわいち 踟躕ちうちうの思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭かしらは我肩に倚りて、彼が喜びの涙ははらくと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼どらの如く叫びし馭丁は、いち早く

登りて梯の上に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁ねぎらうを勞ねひ玉へと銀貨をわた

して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。

いちべつ

一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白き「レエス」な
 どをうづたか堆く積み上げたれば。

エリスは打笑うちゑみつゝこれを指ゆびさして、「何とか見玉ふ、この心が

まへを。」といひつゝ一つの木綿ぎれを取上ぐるを見れば襠むつき褌はな

りき。「わが心の楽しさを思ひ玉へ。産れん子は君に似て黒き瞳ひ

子とみをや持ちたらん。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳

子なり。産れたらん日には君が正しき心にて、よもあだし名をば

なのらせ玉はじ。「彼は頭を垂れたり。「釋をさなしと笑ひ玉はんが、

寺に入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとして敢て訪らはず、家にのみ籠り居しが、或る日の夕暮使して招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亜行の労を問ひ慰めて後、われと共に東にかへる心なきか、君が学問こそわが測り知る所ならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留の余りに久しければ、様々の係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落居たりと宣ふ。其気色辞むべくもあらず。あなやと思ひしが、流石に相沢の言を偽なりともいひ難きに、若しこの手にしも縋らずば、本国をも失ひ、名誉を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの

広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と応へたるは。

黒がねの額はありとも、歸りてエリスに何とかいはん。「ホテル」を出でしときの我心の錯乱は、譬へんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。暫くしてふとあたりを見れば、獣苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の辺の榻に倚りて、灼くが如く熱し、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻背に持たせ、死したる如きさまにて幾時をか過しけん。劇しき寒さ骨に徹すと覺えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の庇、外套の肩に

は一寸許ばかりも積りたりき。

最早もはや十一時をや過ぎけん、モハビツト、カル、街通ひの鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門の畔ほとりの瓦斯ガス燈は寂しき光を放ちたり。立ち上らんとするに足の凍えたれば、両手に擦りこすて、漸やく歩み得る程にはなりぬ。

足の運びはかどの撈はらねば、クロステル街まで来しときは、半夜をや過ぎたりけん。こゝ迄来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて賑にぎはしかりしならめど、ふつに覚えぬ。我脳中には唯ゆるは免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝いねずと覚おぼしく、爛けいぜん然た

る一星の火、暗き空にすかせば、明かに見ゆるが、降りしきる鷺の如き雪片に、乍たちまち掩はれ、乍たちまちまた顛れて、風もてあそに弄もてあそばるゝに似たり。戸口に入りしより疲を覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這はふ如くに梯を登りつ。庖はうちゆう厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襦袢縫むつきひたりしエリスは振り返へりて、「あ」と叫びぬ。「いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜うべなりけり、蒼然として死人に等しき我面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪は蓬おどろと乱れて、幾度か道にて跌つまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪よこに汗れ、処々は裂けたれば。

余は答へんとすれど声出でず、膝しきの頻をのりに戦かれて立つに堪へねば、椅子つかを握つかまんとせしまでは覚えしが、その儘まに地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは数週すしうの後なりき。熱劇しくて譫語うはことのみ言ひしを、エリスが慙ねもころにみとる程に、或日相沢は尋ね来て、余がかれに隠したる顛末てんまつを審つばらに知りて、大臣には病の事のみ告げ、よきやうに繕つくろひ置きしなり。余は始めて、病牀に待するエリスを見て、その変りたる姿に驚きぬ。彼はこの数週の内にかく瘦せて、血走りし目は窪み、灰色の頬ほは落ちたり。相沢の助にて日々の生計たつきには窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺しゝなり。後に聞けば彼は相沢に逢ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞え上げし一諾を知り、俄にはかに座より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に僵たふれぬ。相沢は母を呼びて

共に扶たすけて床に臥させしに、暫くして醒めしときは、目は直視したるまゝにて傍の人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髪をむしり、蒲団ふとんを噛みなどし、また遽にはかに心づきたる様にて物を探り討もとめたり。母の取りて与ふるものをば悉く抛なげうちしが、机の上なりし襦袢じゆばんを与へたるとき、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用は殆ほとんんど廃して、その痴ちなること赤児の如くなり。医に見せしに、過劇なる心労にて急に起りし「パラノイア」といふ病やまひなれば、治癒の見込なしといふ。ダルドルフの癲狂院てんきやうゐんに入れむとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襦袢一つを身につけて、幾度か出しては見、見

ては歎なげ歎なげす。余が病牀をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。たゞをりく思ひ出したるやうに「薬を、薬を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍かばねを抱きて千行ちすぢの涙なみだを濺そそぎしは幾度ぞ。大臣だいじんに随まひて帰東きとうの途みちに上あがりしときは、相沢あいざわと議はかりてエリスが母ははに微かすかなる生計なつきを営たくむに足たるほどの資本しほんを与たまへ、あはれなる狂女の胎内たいたいに遺なし、子の生れむをりの事ことをも頼たのみおきぬ。

嗚呼ああ、相沢謙吉あいざわけんきちが如ごとき良友りやうゆうは世よにまた得えがたかるべし。されど我われ脳裡なうりに一点いってんの彼かれを憎にくむこゝろ今日けふまでも残のこれりけり。

(明治二十三年一月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系」筑摩書房

1969（昭和44）年8月25日初版第1刷発行

1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行

入力：多羅尾伴内

校正：蔣龍

2004年6月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

舞姫

森鷗外

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>